

台木品種の違いが‘輝太郎’幼木の樹体生育及び果実の収量性に及ぼす影響

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

鳥取県内では、従来カキ苗の台木品種は、種子の確保が容易な‘禅寺丸’の実生を主に使用しているが、台木としての評価は行われていない。また、現場の‘輝太郎’の幼木や若木では樹勢がやや弱く樹冠拡大が進まない事例も見られる。

カキ‘輝太郎’の早期樹冠拡大、収量の安定確保を目的とし、台木品種の違いが樹体生育や収量性、果実品質に及ぼす影響について調査した。

(2) 情報・成果の要約

台木品種の違いにより‘輝太郎’の樹体生育や1樹あたりの着果数に差が見られた。‘禅寺丸’の実生を使用した台木と比べ、‘新平’、‘守屋’、‘山柿’の実生を使用した台木では、樹体生育量が多く収量が増えると推察された。

‘輝太郎’の早期樹冠拡大、収量確保を図るには、従来使用している‘禅寺丸’よりも、‘新平’、‘守屋’、‘山柿’の実生を台木として用いることが有効と考えられた。

2 試験結果の概要

(1) 樹冠容積および結果母枝数は、‘新平’、‘守屋’、‘山柿’の実生を使用した台木で多く、‘禅寺丸’の実生を使用した台木で少なかった（図1）。

(2) 仕上げ摘果後の最終着果数は、‘新平’の実生を使用した台木で多く、‘禅寺丸’の実生を使用した台木で少なかった。このため1樹あたりの推定収量も同様であった（図2）。

(3) 果実品質については、‘守屋’の実生を使用した台木と比べ‘禅寺丸’の実生を使用した台木で果頂部果色が高く、シナノガキの実生を使用した台木でへたすきの発生が多かった。その他果実品質に差は認められなかった。ただし、生理落果が多く樹による着果数にばらつきが大きく参考程度と考えられた（表1）。

(4) 後期生理落果率については、‘禅寺丸’の実生を使用した台木で低く、‘新平’、‘守屋’、‘山柿’の実生を使用した台木で高かった。このため本試験では実際の収量性に台木品種による差は認められなかった（表1）。

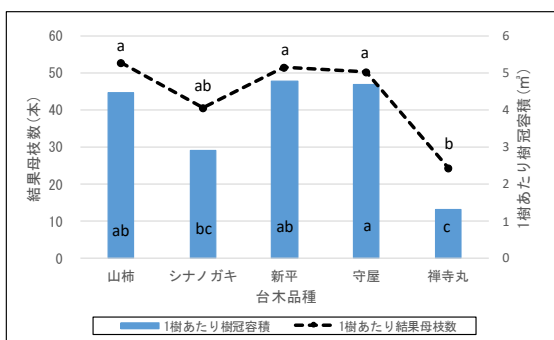


図1 台木品種の違いが‘輝太郎’樹体生育に及ぼす影響 (2019)
本場平棚栽培6年生樹、6~8樹反復
樹冠容積は直円錐として樹冠占有面積（2方位の樹冠径）と樹高から算出
Tukey-kramer法による多重比較検定により異符号間に5%レベルで有意差あり

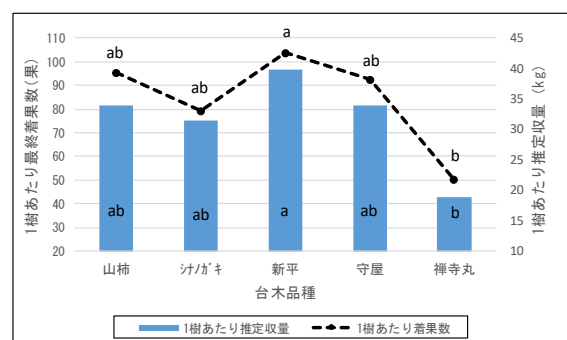


図2 台木品種の違いが‘輝太郎’の収量性に及ぼす影響 (2019)
本場平棚栽培6年生樹、6~8樹反復
1樹あたり推定収量は、最終着果数×平均果重（10/7、果実調査結果）
Tukey-kramer法による多重比較検定により異符号間に5%レベルで有意差あり



山柿台木



新平台木



守屋台木



禪寺丸台木

表1 台木品種の違いが‘輝太郎’幼木の果実品質に及ぼす影響 (2019)

台木品種	調査樹数	平均果重 (g)	果色 (オルシ [®] CC)		へたすき果率 (%)	汚損程度	糖度 (%)	後期生理落果率 (%)	1樹あたり推定収量 (kg)
			果頂部	へた部					
山柿	6	353 a ^z	7.9 ab	3.9 a	12.4 b	0.5 a	16.8 a	83.3 a	5.8 a
汁ノギキ	7	390 a	8.6 ab	4.7 a	36.4 a	0.3 a	16.9 a	67.7 ab	9.1 a
新平	8	381 a	8.1 ab	4.8 a	8.8 b	0.7 a	16.3 a	81.4 a	7.8 a
守屋	6	369 a	7.7 b	4.5 a	11.9 b	0.7 a	16.2 a	83.0 a	5.7 a
禪寺丸	6	367 a	8.9 a	4.4 a	13.3 ab	0.5 a	16.8 a	44.0 b	6.9 a

Z: Tukey-kramer法による多重比較検定により、異符号間に5%レベルで有意差あり
10/7収穫、各樹約10果調査

汚損程度は赤秀程度(0)、青秀程度(1)、優程度(2)、無印程度(3)、出荷不能(4)で評価した平均値
後期生理落果率は最終着果数(7/8)－9/13日着果数
1樹あたり推定収量は平均果重×9/13日着果数

3 利用上の注意点

‘新平’、‘守屋’、‘山柿’の実生を台木として使用する場合、黒ボク土などの肥沃地では、樹勢が強く生理落果を助長する恐れがある。このため水田転換園など樹勢がやや弱く樹冠拡大が遅れるほ場などでの活用が望ましい。また、現在鳥取県内で販売されている‘輝太郎’苗木の台木はほとんどが‘禪寺丸’であり、他の台木品種の使用については苗木生産販売業者との調整が必要である。

4 試験担当者

(河原試験地 試験地長 藤田俊二)